

## 【研究論文】

**明治の商業倫理 Business Ethics in early Meiji Era**

綿引 宣道

長岡技術科学大学

**Abstract**

In Meiji era, many organizational directors were working in companies rival each other. This phenomenon was contrary to Europe's corporate scene, which was based on free competition principles and loyalty to one organization. There were two major reasons for Japan's alternative employment during the Meiji era. First and foremost, while the Japanese government advanced industrial modernization, that is, Europeanization, commercial education in formal schools was delayed, so education of Sekimon-Shingaku was conducted in the private sectors, or informal schools. Secondly, after the establishment of Higher Commercial Schools, commercial morality and ethics were mandatory subjects for three years, which was similar to Sekimon-Shingaku.

**1. はじめに**

明治期の企業家行動を見ると、資本主義では当たり前の競争原理や私的利益の追求とは思えない行動をとっている。例えば、ほとんど日常生活圏に重なる範囲にある同業他社の取締役兼任によるネットワークの形成である(例えば、綿引 2017)。

ところで、日本の近代化に貢献した渋沢栄一、福沢諭吉はヨーロッパの社会制度を手本としていたことが知られている。渋沢栄一は『論語と算盤』においては、当時の商人は士と同じく次世代の社会を作るものとして論語を重視し、一方の福沢諭吉は儒教的思考を否定した。二人とも当時の日本の経済的遅れの原因を日本に宗教がない事が倫理教育に悪影響を与えているとした。福沢の一派は『明六雑誌』を見る限り日本のそれまでの倫理観や社会常識を根底から変えようとしていた。渋沢は「教科中に修身或いは倫理という科目はあれども、本来の目的は達せられて居ない。欧米にては、宗教と云うものに依って精神教育を与へられるが、我邦にはそれが無い。」とし、それを欠点であるとまで述べている(三好 2001)。これはヨーロッパ人のエスノセントリズム的発言を鵜呑みにした感すらある。いずれにせよ日本の近代化のためには倫理・道徳の教育を重視していることには間違いない。

当時のオピニオンリーダー達は各論で大きな影響を与えたものの、日本の方向性について決して統一した見解を持っていたわけではない。

一方、明治維新以降の急速的な経済発展を従来の宗教倫理に原因を求める研究がある。Bellah(1957)は日本の宗教の明治維新以降の近代化に与えた影響をヨーロッパにおけるプロテスタントと同様に見ていたことが知られている。

そこで本研究では、資本主義経済であれば当然の市場競争よりも協調を選んだのかを中心に、

明治維新以降の倫理教育と企業の行動原理を探る事を目的とする。

## 2 宗教的側面

### 2.1 石門心学

石門心学（以下、心学と略す）は宗教ではないが、宗教的倫理観の影響を強く受けている。もはや心学の特徴は、山本七平らがいう「日本教」というべきものであり、神道、仏教、儒教の混然一体となったもので、日常的活動の中に内在化され無意識のレベルで行動する基準であった。主に心学は近江商人たちに受け入れられ地方に広がり、提唱者の石田梅岩の弟子である手島堵庵らによって地方に心学を教える私塾が作られた経緯がある。この三教が融合した心学における倫理観は、Kantのような形而上学的なものではなく極めて実践的ではあるが心学者達に統一の見解の教義並びに倫理があったわけではない。

### 2.2 神道倫理

柴田(1967:8)は、「天照大神が質素を旨とし民を憐れ給うことや、正直を尚びたもう事を説いて、三社託宣を援引している」として、心学は神道の影響を強く受けているとする。

神道の宗教的特徴は、「記紀」に記述される神話は存在するが、厳密な意味の教義がない。罪と穢れに関する概念はあるが、避けた方が良い事あるいは不吉な予兆として神話の中では書かれるに過ぎない。共同体を守ることが倫理であり、競争よりも相互扶助による発展を美德としている。これは稲作農業の影響とみられ、畑作や牧畜とは異なり、水田は地域コミュニティ内での共同作業がなければ営農は不可能であるからである。

また、人間は神の子孫であるとした究極の性善説に立つが、神道とは正反対の性悪説の性格を持つ一神教は生まれながらに背負う原罪から逃れることはできないとする(見田 1965)。このため一神教は常に死後の救済を求めて神との契約をしなければならず、常に教義を意識しなければならない。神道の場合は本居宣長の見解によれば「畏れ多いこと」が神の定義であり、神の存在を感じる事が中心になる。一神教は神との直接的契約を通じた上でコミュニティとの関係があるのに対して、極論すると神道はコミュニティとの関係を維持することが神とも関係を持つことになる。そうすると神のみならずコミュニティに対する感覚も大きく異なる。渋沢栄一のような批判が出るきっかけとなっていよう。

### 2.3 仏教倫理

日本では仏教伝来以降、神道と仏教の融合が垂迹神道の形での融合が始まった。この時点で仏教はかなり日本風に変化した。特に、曹洞宗の僧侶鈴木正三による「万民徳用」によって聖俗の融合と商人の社会的地位の確立につながった。この発想は大乗仏教から見ても画期的であり、他の仏教国と比較しても日常生活を正しく生きる事が修行活動と同じとすることも特徴的である。これが心学の核となる部分である。その後石田梅岩によって心学が確立され、その後全ての人々が救済される世界を作る浄土宗的思考を色濃くしていく。

続いて仏教「衆生の恩」である。これは身分の貴賤はあっても、貴人は賤民がいるから貴人たり得て、賤民は貴人によって守られるのであり、貴人は独りでは貴人たり得ないとする。これは

徳と3年制の学校でありながら道徳・倫理科目の履修が全ての学年で義務付けられている<sup>1</sup>。これは、小樽高商に限らず神戸高商でも同様の教育が行われている。

当時京都大学の教授であった谷本(1908)は、西洋の倫理学において道徳的行為と経済の調和がなされていないと批判する。「固ヨリ毫モ使用人ヲ愛護スルノ志ナシ、唯ダ之レヲ重要ナル機械ノ一部ト看做シ、労働ノ時間ヲ長クシナガラ、賃金ヲ吝ミ、剩ヘ彼此競フテ年齒壯ニシテ腕力強健ナル者ヲ採用シ、未ダ四十歳ナラザルニ早ク雇口ヲ失ヒ・・・(谷本 1908:602)」に加えキリスト教倫理への批判も加えている。さらに、理想を「人生固有ノ愛他的天性ヲ發揮シ、同業同胞ヲ敬愛シ、無法ノ競争ヲ避け、顧客ノ便利ヲ図リ、使用人ノ幸福ヲ造シ、以テ彼我共ニ和樂スベシトスル・・・」と西洋の競争原理を否定している。

このように、明治後半になっても少なくともアダム・スミスの倫理観すなわち競争原理による経済の発展を否定している。むしろ、この時代に至っても商業倫理は心学的な色彩を帯びていたようである。

では、どのような教育を行ってきたかであるが、『商業道徳教科書』によれば、第1章「信用ヲ得ルニ必要ナル諸徳」では「正直」、「専心」、「自助」、「忍耐」、「勤勉」、「節儉」、「礼容」、第2章「商業ノ管理ナル諸徳」では、「秩序」、「能ク人ヲ知り用フルコト」、「人ヲ遇スルハ厳ナランヨリ寛ナルベキコト」、「雇用人ヲシテ皆協同ノ利益ヲ思ハシムルコト」、「綿密」、「果斷附機敏」、第3章「商人ノ公共心ノ必要ナルコト」では、「文明ノ進歩スルニ從ヒ社会公共ノ事業益増加シ来リタルコト」、「商業ノ發達スルト共ニ貧富ノ懸隔漸ク甚ダシキ致セルコト」、「公共ノ事業ニ尽力セシ人ノ例」、「積善ノ家ニハ余慶アリ」となっている。

少なくとも西洋倫理として論点に上がりにくいものが多く、特に「徳」「社会公共性」や、むしろ心学の延長線上にあると言えよう。大正から昭和にかけて一時的にマルクス主義的な流れもあったが、教育内容は基本的に心学を中心としていた(長廣 2017)。

## 4 検 討

柴田(1967:166-171)の所論では、1870年の大教宣布により心学が神道の流れを汲むものとして認められた。明治政府の公認を得たのであるが、私塾から学校制度が確立するにつれて以降徐々に心学は衰退していったとしている。

確かに柴田が主張するように「心学」として直接教える場そのものが、学校によって置き換わっていった経緯は認めざるを得ないが、教育内容、思想そのものはどうであったかは別問題ではなからうか。教育においては、各家庭において任意の学校あるいは家庭教育が原則で学制以降、それ以降も商業教育についても、代々引き継がれた教科書を使ったことからまさに「和魂洋才」

<sup>1</sup> 小樽高等商業学校編、『小樽高等商業学校一覧自大正13年至14年』  
国会図書館デジタルアーカイブ(2018/9/6 アクセス)  
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/941142>

と江戸後期からの倫理観の強い影響があったと思われる。

むしろ行動原理に影響を与えたのは世代間の違いではないかと予想される。そこで、①明治維新実行世代、②日清戦争開始時期に管理職の世代、③日露戦争開始時期に管理職世代で分類して考える。

#### 4.1 明治維新実行世代

この世代は天保年間生まれ(1830年代から40年代前半)で、幼い時に飢饉を経験し、嘉永のペリー来航から安政の開港期に青年期を迎えた世代である。水戸学など国粹的思想が流行し、実際に生麦事件や薩英戦争を経験した世代にとっては、外国列強から国を守る手段として商業活動を考えていたと思われる。例えば、岩崎弥太郎(1835-1885)や渋沢栄一(1840-1931)が代表的産業人であるが、国家に貢献を強く主張している。

#### 4.2 日清戦争開始時期に管理職の世代

嘉永から安政にかけて生まれ(1850-1860)、文久以降明治維新の頃に少年時代だった世代である。明治維新は基本的に士階級では大事件として捉える一方で、庶民階級では一部の軍資金の教養を受けた富豪を除いて他人事であったようだ(色川 1970)。この世代は教育を受ける多感な時期に秩禄処分、散髪脱刀令や鉄道の普及、外国製品の流入で日に日に社会の変化を目の当たりにしている。西南戦争や萩の乱といった時代に取り残された士族と時代の変化の波に乗れた一部士族(主に下級士族)とその授産事業、商人との共同事業で時代の変化についていけた人とそうでない場合の差が出始めるのを教育期間中に見てきた世代である。

#### 4.3 日露戦争の以降に管理職世代

明治維新前後数年(1875-1885)以内に生まれた人で、この世代は商業教育を受けるにも制度は整備されておらず、工業教育が先行していた。帝国憲法の制定と様々な制度ができ始め、一方で海外でも日本人が働き始める時代である。働き始めるようになった時代でも、政策的にも外資をかなり厳しく規制していた時代であった。この世代が働き始めるようになってから商業教育が公的制度として行われるようになっていく。

## 5 結論

取締役の兼任による企業間のネットワークは、資本主義の競争原理の観点からすると大きく外れるものである。その原因として、次の事が考えられる。第一に、明治時代の企業家あるいは管理職になった人たちは、アジア諸国の植民地化を目の当たりにしていた。これは日本国の一員を意識せざるを得なくなっていた。第二に、江戸期から寺子屋等で教育されてきた心学、特に心学における相互扶助の影響が大きいと思われる。明六社が啓蒙思想として欧州の思想や技術を入れようとしており、福沢諭吉の著作による全国規模での影響もあるものの、実際の私塾等や初等教育での教育は、これまで寺子屋で用いられた教科書で内容もそれほど変わらなかった。これにより、直接的にも間接的にも心学の教育を受けていた。そして工業化が進んだとはいえ日本の地方は厳然として稲作農業が中心であり、頼母子講のような顔が見える範囲での互助が日常的

になされていたことが、共同関係になりやすかった。

以上のような状況から見ると、明治期では競争原理による私的利益の最大化は心学では避けるべき事であり、本来であればライバル関係になるはずの同業種間で取締役の兼任が観測されるのはある意味自然な流れである。

### 参考文献

- Bellah, Robert Neelly. (1957). *Tokugawa Religion: the Values of Pre-industrial Japan*, Falcon, 堀一郎・池田昭訳(1962)『日本近代化と宗教倫理—日本近世宗教論』東京:未来社.
- 坂野鉄也.(2016).「高等商業学校『商業道德』の素描：『商業家』のための倫理とは」『滋賀大学経済学部研究年報』(23), 59-78.
- 色川大吉.(1970).『明治の文化』東京:岩波書店.
- 小見山隆行.(2010).「日本商業教育史からみた連続性・非連続性の考察—徳性の涵養を中心に」『愛知学院大学論叢 商学研究』50(2・3), 285-312.
- 見田宗介.(1965).『現代日本の精神構造』東京:弘文堂.
- 宮本又次.(1940).「江戸時代商人意識の具現：経済倫理の歴史的考察」『彦根高商論叢（彦根高等商業学校研究会）』(28), 59—101.
- 三好信浩.(2001).『渋沢栄一と日本商業教育発達史』東京:風間書房.
- 三好信浩.(2016).『日本の産業教育—歴史からの展望』名古屋:名古屋大学出版会.
- Najita, Tetsuo. (2009). *Ordinary Economies in Japan: A Historical Perspective, 1750-1950* ., University of California Press, 五十嵐暁郎（監訳）(2015)『相互扶助の経済：無尽講・報徳の民衆思想史』東京:みすず書房.
- 中島力造.(1901).『商業道德教科書』東京:同文館.
- 長廣利崇.(2017).『高等商業学校の経営史：学校と企業・国家』東京:有斐閣.
- 西村茂樹.(1887).『日本道德論』西村金治（私家版）.
- 柴田実.(1967).『心学』東京:至文堂.
- 芹川博通.(1994).『経済の倫理：宗教にみる比較文化論』東京:大修館書店.
- 谷本富.(1908).「商業道德ヲ論ズ」『経済学商業学国民経済雑誌（神戸高等商業学校）』5(5), 609-632.
- 谷本富.(1911).「商業道德ノ基礎」『経済学商業学国民経済雑誌（神戸高等商業学校）』11(5), 701-716.
- 津村秀松.(1911).「日本の商業道德ト国民道德」『経済学商業学国民経済雑誌（神戸高等商業学校）』12(3), 407-440.
- 綿引宣道.(2017).「明治初期農村地域の社会関係資本と株式取引のネットワーク分析：小千谷銀行の株式取引」『弘前大学経済研究（弘前経済学会）』(40), 29-45.

この研究は科学研究補助金（基盤研究C）課題番号18K01748の補助を受けたものである。